〔資料紹介〕伊藤左千夫作「真間の手古奈」と左千夫旧蔵、筆者不詳「俳人一茶」

貞光　威

ここに紹介するのは、伊藤芬（かおる）旧蔵で、いま大木（旧姓、春木）千枝子氏が所蔵されている、伊藤左千夫の自筆で、毛筆による草稿「真間の手古奈」と、伊藤芬（かおる）から大木千枝子氏に渡り、現在は千葉県山武郡成東町の成東町歴史民俗資料館所蔵の、やはり毛筆であるが、作者不明の草稿「俳人一茶」である。それを活字化し、その一部を写真で示した。

ここでまず、二点の原稿の伝来について紹介するために、伊藤芬について説明すると、芬は伊藤左千夫の長兄である広太郎の長男で、明治十一年三月二十六日に生まれ、昭和三十五年二月二十三日に亡くなっている。芬は若い頃に東京本所の左千夫の牧場で働き、やがて独立して、左千夫と同じく牛乳搾取業を、左千夫の家の近くで営んだ人物である。左千夫の没後、左千夫の原稿・遺墨・遺品の類の多くをこの伊藤芬が譲り受けた。

後に芬から原稿・遺墨・遺品の類を譲られた大木千枝子氏は、左千夫の姪の娘にあたる方である。すなわち、左千夫の兄の岩沢房吉の長女、まつの娘である。その上、千枝子氏の父方の祖父は大木茂といって、歌人で、左千夫と交友があり、左千夫の小説「廃める」に出てくる「大木翁」のモデルとなった人である。茂の子、すなわち千枝子氏の父親の半四郎氏は、左千夫が水害に遭った頃にはごく近くに住んでいて、食べ物や飲み物などを運んで助けるという間柄であった。

千枝子氏は、千葉県教育委員会の社会教育主事、千葉県中央図書館奉仕課長、資料課長、松戸市教育委員会社会教育課長などを歴任して活躍の一方、ガールスカウトの運動にも長らく尽力され、ガールスカウト日本連盟の理事をつとめてこられた。千葉県教育委員会に勤務された時代などには、土曜や日曜などを利用して、市川市か

ら当時、山武郡成東町に隠棲していた伊藤芬のもとに足繁く通い、左千夫の経歴や人間関係などについて聞き取りをしたり、芬所蔵の左千夫の原稿を書き写したりされた。

伊藤芬は昭和三十五年に世を去ったが、芬の生前の約束により、左千夫の原稿のほか、彼の書簡、また彼のもとに寄せられた歌人などからの書簡、彼の生前に愛用の品々など、関係の資料がほとんど千枝子氏に譲られた。今述べたような千枝子氏と左千夫とのつながりの深さにもよるが、日頃の左千夫への傾倒や熱心な研究ぶりに芬が動かされたことによるものであろう。その研究調査の結果を公にし、芬から譲られた原稿や書簡を活字化して発刊されたのが『歌人伊藤左千夫』(昭和四八年九月　新樹社)で、まだ『左千夫全集』の刊行される前のことだったから、左千夫の研究の上に裨益するところが大きかった。昭和五十二年一月から十二月にかけて岩波書店から刊行された『左千夫全集』全九巻には、『歌人伊藤左千夫』に収められたものも含めて、千枝子氏が提供された資料が多数用いられている。千枝子氏は成東町歴史民俗資料館友の会から『左千夫さん』という子供向けの伝記の本も出しておられる。なお、氏は後にこうした原稿、遺墨、遺品などの多くを左千夫の郷里の成東町に寄贈されたし、成東町歴史民俗資料館としても、郷土の歌人・小説家伊藤左千夫顕彰のために資料の収集に努めておられるので、いろいろの資料を、この資料館で見ることができる。

ここで、二つの原稿について紹介すると、まず、「真間の手古奈」は縦二四・一センチ、横三四・四センチの罫のない和紙七枚に書かれている。一枚一八行、一行には二二字から二五字ほどが書かれ、一定しない。加除訂正をした推敲の箇所がところどころに見える。筆跡は他の左千夫の署名のある原稿と同じで、左千夫の筆と見て間違いないであろう。

この「真間の手古奈」は左千夫が明治四三年一〇月から翌年四月まで「台湾愛国婦人」という雑誌に発表した「古代之少女」という小説の、全一四節のうちの第一節の途中から第二節の終わりまでの草稿である。岩波版『左千夫全集』の第三巻には小説「女と男」の草稿として「笑はぬ夫婦」が四二一ページ以下に、また「雲」の草稿として「醒」が四二六ページ以下に収められている。本来なら、この二つと同様に巻三の巻末に載せられるべきところのものである。なお、この草稿には標題が記されていないが、便宜の上から「真間の手古奈」と仮に題を付けた。『左千夫全集』第八巻の三四五ページ以下には「遺稿遺著蔵書目録」が載っており、その三四七ページには、

「真間のかぎろひ」(原稿)七枚

と記されている。これが、ここに紹介する草稿かと思われるが、草

稿には標題にも本文にも「真間のかぎろひ」とは見えないので、女主人公の名を借りて、標題を「真間の手古奈」としておく。山部赤人や高橋虫麻呂の和歌で知られる、「万葉集」の伝説の美女、真間の手古奈を女主人公とした作品である。ただし、万葉集の歌に歌われた真間の手古奈は、美女といっても多くの男性を誘惑して止まなかったタイプの女性であったのに対して、左千夫の描く手古奈は、「野菊の墓」や「隣の嫁」等に登場する女主人公と同様に純真でうぶな女性である。「真間の手古奈」と「古代之少女」との間には、先にも述べたように、相当の加除訂正が行われており、左千夫が一つの作品を書くにあたって、どのように推敲を加えたかを知る、得難い資料である。

次に、「俳人一茶」について述べると、これは一三枚の、縦二四・五センチ、横三四センチの罫のない和紙に墨で書かれ、それを二つ折りにしてあり、それに表紙が付けられ、計一四枚からなる。表紙の左上の隅に記された題は、元々は「詩人一茶」とあったのを、「詩」を消して「俳」となおしてある。本文の第一行にも題が書かれ、やはり「詩」が「俳」となおしてある。この題名の訂正を行ったのが筆者自身であるか別の者であるかは、識別が困難である。本文は罫なしであるが、罫のある下敷きでも使ったらしく、二つに折った表・裏とも各一二行、一行の字数は大体が二四字となっている。句読点に一字分空けることはしていない。字数は約八千字、四百字詰原稿用紙で二〇枚ほどの長さである。文末には、

明治丙午蝋月四日夜起稿　毎夜執筆　十一日夜脱稿

とある。「明治丙午」は明治三十九年に当たる。

この原稿には、表紙にも、文末にも署名がない。

左千夫が師と仰いだ正岡子規は、短歌よりむしろ俳句を本領としたから、根岸派歌人は俳句にも関心を持つ場合が多かった。根岸の子規庵での句会に出て句を詠み、子規にほめられたことを左千夫は追憶として書いている。左千夫は全集に俳句を三十一句残しており、「楽人漫言―呈獺祭書屋主人」、「叫びと俳句　一」、「叫びと俳句　二」のような俳論も書いている。この文章の書かれた年、明治三十九年に左千夫が発表した「野菊の墓」が載ったのは俳誌の「ホトトキス」であったし、単行本として刊行されたのも、籾山仁三郎の経営する俳句専門の出版社の俳書堂であった。この頃の左千夫は俳人たちときわめて深い関係を持っていたのである。

このように俳句と左千夫とはつながりが深かった上に、一茶の郷里の信州には、この地に「アララギ」の同人が多かったこともあって、左千夫は度々訪れている。また、左千夫の庶民的で子供を可愛がる性質は、一茶のそれとも通じる。

こう考えると、左千夫のもとにあって、伊藤芬、大木千枝子氏を

経て、現在、成東町歴史民俗資料館所蔵の無署名の草稿「俳人一茶」は左千夫の作と考えるのが普通であろう。そのように判断された人もあって、昭和六十一年十一月には「千葉日報」ほか、いくつかの新聞に、「伊藤左千夫の未発表原稿発見」などと報じられた。

しかし、文章の書き方に左千夫とは思えないところが見られるし、左千夫の手紙や記録などにも、この「俳人一茶」執筆に触れたものは見当たらない。その原稿の筆跡を子細に見ると、左千夫のそれとはどうも違うように思われる。筆者の勤務する岐阜教育大学で書道を指導しておられる篠田文子先生に見ていただいたところ、平仮名や漢字の文字一つ一つについて、書き癖を慎重に比較して調べられた上で、「俳人一茶」は伊藤左千夫とは別の者の筆であると判定された。篠田先生は、岐阜女子大学の文学部国文学科の書道コースで教鞭をとっておられ、大学院の授業も担当の西本滋子・中村重勝両先生にもお考えを聞いてくださったが、やはり別筆とのご意見だったとのことである。

この「俳人一茶」は今までに発表されたことはないのか。そして、執筆者も明らかになっているのではないか。その点について、信濃毎日新聞社刊行の『一茶全集』の編纂に携わられ、『一茶の総合研究』（信濃毎日新聞社）や『一茶大辞典』（大修館書店）などの著者で、一茶にたいへん詳しくあられる、二松学舎大学の矢羽勝幸先生に「俳人一茶」の原稿を見ていただいたところ、この文章は今までに発表された形跡はないとのご教示を得た。

明治年間に一茶の俳句について論じたものに、どのような作品があるかを、前掲の『一茶の総合研究』『一茶大辞典』や、『一茶事典』（おうふう）などによって調べてみると、明治三十年に宮沢義喜・同岩太郎の両名によって、『俳人一茶』と題する一茶の句集が出ており、この句集には付録として正岡子規の「一茶の俳句を評す」という題の評論が付いている。これは今、講談社から出ている『子規全集』の第四巻六九一～六九四ページに収められていて、四百字詰の原稿用紙にして八枚ほどのものである。それに続く評論の公刊は、東松露香の『俳諧寺一茶』と、渡辺千秋・国武の両名による『一茶俳句兄弟二色評』のようであるが、これは共に明治四十三年の刊行で、ここに収めた「俳人一茶」の執筆された明治三十九年より後になる。筆者に見落としがなければ、この「俳人一茶」は、子規のそれに次ぐ一茶についての評論と言えそうであり、しかも文章の長さからいっても、また扱った俳句の数からいっても、子規のものよりいっそう本格的なものと言えよう。

このように考えて、筆者は今のところ不明であるけれども、明治三十年代に、このような特色ある一茶論が書かれていることを明らかにすることは、一茶の俳句の受容の歴史を明らかにする上で意味

があるのではないかと、ここに活字化することにした。筆者を推定していたただく手掛かりになればと、九九ページに一部ではあるが写真を付け、篠田先生に作っていただいた、「真間の手古奈」と「俳人一茶」との筆跡比較表も一〇〇～一〇三ページに付した。幸いに識者の助けを得て、「俳人一茶」の筆者が明らかになる日のくることを鶴首して止まない。

この「真間の手古奈」「俳人一茶」の原稿の活字化、公表をお許しいただき、多大のご援助をいただいた大木千枝子氏、ならびに成東町歴史民俗資料館の皆様方に深く感謝の意を表したい。

なお、小生は近世文学には全くの門外漢で、一茶の俳句や筆跡のことに甚だうといこともあって、このたびは多くの方々のご援助を仰いだ。特に矢羽勝幸、松井利彦、野田千平、小瀬渺美、篠田文子、西本滋子、中村重勝、の各先生方には格別のご指導をいただいた。ここに記して、心から御礼申し上げる次第である。

「真間の手古奈」凡例

一、原文の漢字は正字と略字とが混用されている。漢字の字体は原文のままとした。
一、原文の仮名は、濁音の表記を施したところと施さないところとがあって一定しない。適宜、濁点を付した。
一、送り仮名は原文のままとした。
一、原文には七ヵ所だけカタカナで振り仮名がつけてある。ほかにも適宜に振り仮名を施した。原文の振り仮名はカタカナ、新たに加えた振り仮名は平仮名とした。
一、原文には文末にも読点を施した箇所があるが、句点に改めた。
一、適宜、段落を施した。
一、会話の部分にカギ括弧を施した。
一、原文の筆者の書き誤りと見られるものは改め、脚注で、そのことをことわった。

一、脚注で事項や語句の簡単な説明を加えた。

真間の手古奈

表の戸も明いて居り、庭には一面に籾が干されてあるに、留守居の人も居ないのかと見れば、やがてうら若い一人の娘子が白き腕をあらはに鬱金の襷を背に振りかけながら土間の出口へ現はれた。麻の衣に青衿つけた極めて質素なつくり、掻き垂れ髪を項のほどりに束ねて、裾短かに素足を蹈む。帯と襷にいさゝかな飾りを見るばかりだ。手古奈には飾りもつくりもいらぬらしい。美しい目、美しい口、美しい鼻、いふも愚かな話だ。胸からも頸からも光がさすのである、春花の笑み咲くとか、紅玉の丹つらふ色とか、そんな形容語も手古奈に対しては役に立たない。籾の始末と留守居をかねて、今日は手古奈が独り家に残つたのであらう。日の傾くまゝに今おり立つて、籾の片づけに取掛るところらしい。

此夏の末の頃から、何の用とも判らなく三日とあけずに真間のあたり駒を乗り廻はして、雨風の日にさへ姿を見する郎子があつた。殊に榛の木の門口や南天垣の外には蹄の跡の消える間もないといふ位であつた、果ては里のだれかれもそれと勘づき、噂の高きにつれて、物蔭から悪態ついてやつたといふものもあるとの事で、それらのためか、此一月許りが間姿を見せなかつたが、今日は突然例の葦毛の駒が垣根の外に留つたと思ふと、郎子は人を憚かるさまに手古奈が家を窺ふらしく、やがて馬を降りた。郎子は目敏く手古奈が家には今手古奈が一人であることを認め、つと馬を家の脇に引入れ、木立の蔭を見計らうて、そ

○鬱金＝濃い黄色。

○ほどり＝「ほとり」または「ほど」か。

○手古奈＝千葉県市川市真間のあたりにいたという伝説上の美女。万葉集で山部赤人（巻三、四三一～四三三）や高橋虫麻呂（巻八、一八〇七・一八〇八）などによって歌に詠まれている。

○愚かな話＝原文「愚か話し」。

○勘づき＝「疳づき」を改めた。

○葦毛の駒＝白い毛の中に、黒などの色の毛がまじっている馬。

○脇＝「協」を改めた。

この橘に馬を繋いだ。彼は最も懇ろに最も丁寧な詞つきで、

「暫くの休息を許して給も。水一杯をふるまふて給も。」

と乞ふた。

言ふまでもない。郎子は手古奈のために荒海の波の轟く噂に立つた私部小室である。手古奈は此頃姿さへ見せれば土地のものどもに蔭にあらはに彼是云はれるが耻かしく、たやすくは家から外へ出なかつた。まことを言へば小室が隣国の縣主といふ高き身分の身でありながら、自分に一方ならぬ思を寄するものと知つて、如何で小室其人が憎からう。今日迄詞交したことは勿論、親しく顔見合はしたこともなけれど、手古奈の顔に見とれるのであらう。髻の毛、前髪の毛、繕ろはなくもふつくりと形がよい。鮮かな晴々とした手古奈の面持には、胸に考へごとのあるやうな風でない。昨日の出来事から宵に相談した事など一切忘れて居るかの如くである。一筋に思ひつめた時には涙を絞るほど感動するが、少しく過ぎて気が変はれば、煙の消え去るやうに前のことを忘れるのは手古奈位の年頃には普通のことらしい。手古奈は現なく井戸の紅葉を見て小唄を唄ふのである。

稲つきて皸る吾手を
今宵もか
殿の若子がとりてなげかむ

忘れてゐる様に見えても忘れて居るのではないのか、今は紅葉を見て居るでもなく、水を汲まうともせず、繰返々々し同じ歌を唄ふてゐる。手古奈は矢張り苦悶してゐるらしい。

美人は如何な場合にも調和する。手古奈は茅屋の主人としても調和する。井戸端の人としても調和する。

○給も＝給はれ→たもれ→たも。「ください」の意。

○出なかった＝原文「出なかっつた」。

○「髻」の字は大修館書店の『大漢和辞典』にも見当たらない。眉と同じか。

○稲つきて皸る吾手を…＝「稲つけば皸る吾手を今宵もか殿の若子が取りて嘆かむ」（万葉集巻一四、三四五九）という東歌による。

○調和する＝原文「調和す」。「る」を補った。

吾に思ひを寄せるといふ人を如何なる殿と知らで居らるべき。小室が白がねに飾れる太刀を紫匂へる緒に撥結ひ、肥えて勇める葦毛の駒に練りゆくは、さすがに縣主の品も高く、雄々しくもある壮士振り、手古奈も取りとめなき物思に寐そこねた夜も一夜二夜ではなかった。

されば今日の會見は小室にも手古奈にも決して突然な筈はない。決して突然な筈はないが、さし當っての心持ではなか〳〵突然以上である。極めてうぶな少女心の奥のどん底に既に何物かが潜み居る。

手古奈は今、眼近く小室を相見た瞬間、総身しびれる許に、すべなさ、耻かしさ、記憶も判断もなくなった。自分で自分の手足の動くに覚えがない。手古奈は命令されたかの如く手の物を措いた。襷をはづし、肘を垂れて、軒下に小室を迎へる。

「いぶせき限りにはべれど、み腰掛けて給もれ。湯も沸きあるに。」

と夢現ともわかず挨拶した。

小室は掛けてる。手古奈は立ってゐる。小室は今、手古奈から受取った片碗をみつめてゐる。手古奈は自分の足の爪先を見つめてゐる。光景の静かさは互いに鼓動する心臓音も聞き得らるゝ許である。それでも小室は湯を飲むといふ動作を持って居るだけ、此間のぶまを紛らはすことが出来たが、身分ある人といふに加へて、恋といふ関係さへある人の前に立ってゐる手古奈の、其すべなさ加減は詞につくせるものでない。殆ど人形である。人形が呼吸して居るとしか思はれない。思ひ焦れて漸くに差向に語るべき機會を得た小室でさへ、手古奈に逢って語るべき詞は千遍万遍復習して居ながら、今更言ひ出づべき詞の順序すら立たない位であるから、手古奈が人形になって了ったは當前である。

○紫匂へる緒＝鮮やかな紫色の紐。

○いぶせき＝むさくるしい、きたない。

○片碗＝水を汲む、蓋のない土製の碗。

○ぶま＝まのぬけたこと。気のきかぬこと

小室は漸く一碗の湯を飲み盡し、言ひ出づべき詞の工夫に全身の力を絞ってか、男ながら顔のほてりを隠しおほせないのである。

「里の人等の眼にも留るまで、こなたの近くを迷ひあるき、さぞな心苦うおぼしてゞあらう。切なき思ひの詮なさに、耻も忘れて禮なきたはごと、男児らしくもなしとさげしみ受けむも知りての上。何事も君に恋ひての迷ぞ。只々禮なきを赦して。」

と乞ひぬ。賢しく武けくと誉れ高い縣の殿ともある人の、何といふ謙遜な詞であらう。是れ以上に謙遜ないひやうはない。彼の女を思ふの情、深いだけそれだけ自分をへり下る念が強いのか、手古奈の美は神に近いが、心は矢張人間に相違ない。眞情に動く心は、寧ろ並みの人に勝って居る。小室が語る其詞は眞情さながら聲と響く。風に對する黒髪か、流れに靡く玉藻のそれ。手古奈は覚えず涙ぐむ。

「賤しき身には余りに勿躰なき仰せ……仰せ眞にましまさば……空蝉の吾世の極み玉の緒に縒りて結はまし君か御言を。」

手古奈が答え、自然に唄である。此わたりに誰知らぬものなき私部小室、改めて名を告ぐるは言を眞と明す習ぞ。手古奈は有りし事らを父母に計らんため名を問ふたのである。小室は手古奈の心、大方は推し得て、面持見るからに活気をおむできた。沸き激つ血汐に心どよめくは、かゝる時に誰しも覚えはある。たとへば五月雨の雲薄らぎつゝ、おぼろげに太陽を認めた時、正に来らむ快晴を豫期し得た心地である。両人の問答は斯く簡短に終を告げた。詞少ないだけ餘韻無量の感は残る。

小室はどよめく思を動作に紛らはし、立つて別れを告げた。別れに臨みいふ。

「君に逢ひし日の贈物と夜晝置かず身に持てるもの、今日の紀念のしるしとも見よ。」

○禮なき＝礼儀をわきまえない。無礼な。
○たはごと＝正気を失って口走ることば。
○さげしみ＝「さげすみ」の訛り。軽蔑。
○縣の殿＝朝廷の直轄領を支配するお方の意。

○空蝉の…＝「そのお言葉は一生忘れません」の意を短歌の形で言った。

○計らんため＝「諮らむため」で、「相談するために」の意。
○おむできた＝「帯びてきた」の訛り。

手早く置くは、綾も珍らし倭文幡帯、手古奈はあはてた。余りに突然な為め、とみには分別もつかぬ。これを受取っては早許したも同じではあるまいか。篤と父母に計つて、と思ひしものを……。如何にせようとの迷ひもおそかつた。太刀の鐺地を突く音に心づいた時は、小室は早馬上の人であつた。帯には二首の歌が添てある。

相見るは玉の緒ばかり
戀ふらくは
冨士の高峯の鳴澤のごと

かつしかの眞間の入江に
朝宵に来る潮な

○倭文幡帯＝唐から輸入されたものでなく古くから日本にある織物で作った帯。
○とみには＝とっさには。
○鐺＝刀の鞘の端の金具。
○相見るは玉の緒ばかり…＝こうしてお逢いできるのは、ほんのしばらくの間なので、お逢いしたいと焦がれる気持は富士の鳴沢のように激しいことです、の意。「さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは冨士の高峯の鳴澤のごと」（万葉集巻十四　三三五八、東歌）を基にしている。
○かつしかの眞間の入江に…＝第五句が欠け、第四句も完全でないので、歌の意味がはっきりしない。「かつしかの真間の入江にうち靡く玉藻刈りけむ手古奈し思ほゆ」（万葉集巻三、四三三、山部赤人作）を基にしている。赤人の歌の意味は葛飾の真間の入江にただよう美しい藻を刈っていたという手古奈のことが慕わしく思われる。

「俳人一茶」凡例

一、原文の漢字は正字と略字とが混用されている。漢字の字体は原文のままとした。
一、原文の仮名は、濁音の表記を施したところと施さないところとがあって一定しない。適宜、濁点を付した。
一、送り仮名は原文のままとした。

一、原文には読点がかなり多めに施されている。読点は適宜に省いた。
一、原文には七ヵ所だけ振り仮名がつけてある。ほかにも適宜に振り仮名を施した。原文にある振り仮名には〔　〕を付けて区別できるようにした。
一、書名、引用、会話の箇所にカギ括弧を施した。
一、適宜、段落を施した。
一、筆者の書き誤りと見られるものは正し、脚注でそのことをことわった。ただし、「子供」を「小供」とするような筆者の書き癖はそのままにした。
一、原文に引用してある一茶の作品の中には、一般に知られているのと異なった形のものが見られる。その場合は脚注で異同を記した。
一、脚注で事項や語句の簡単な説明を加えた。

俳人一茶

詩は運慶の鑿にして材を木に求めて素朴、歌は宗珉の刀にして材を金に採りて繊細、俳は幸助の鏝にして材を土に得て蕭鬆。この三つの者何れが優れりといふは、風雅の道を知らぬものゝ論なり。姿こそ異なれ、心は一つ種なり。木金土と別るゝはその徳を見はさんが為めにして別るゝことなければ、天の功は知るべからざる也。されば、詩歌俳の別るゝはその趣を見はさんが為めにして別るゝことなければ、人の文は知るべからざる也。実に別るゝ所ありてこそ風雅の道はその美を伝ふるなれ。

さて、幸助の鏝一流に思を凝らして美を伝へたる作家は多けれども、粘土の疎密をも考

○運慶＝鎌倉初期の彫刻家。
○宗珉＝江戸の金工。横谷友常
○幸助＝陶工の名らしいが不詳。
○風雅の道＝詩歌・文章の道。文芸。

へなして、標本を撰み意匠を立つること同じからねば、皆向々に姿を異にせり。わけても芭蕉は月が瀬の梅の花露滴るる谿の丹土を採り、放鶴の翁の痩せたるをうつして閑寂の趣を作り、蕪村は瀬土の埴を用ゐて金の鯱の今しも跳らむずる姿をうつしたり。獨り一茶は更科の蕎麦畑より泥土を掘り取りて乳房たくる兒の玩具にとてか、犬ころといはず人形といはず作れるは、粗笨なれどもその不恰好なるところにおかしみの姿ありて一種の趣あるは、一茶の鰻扱ひの非凡なりしによれり。

さて、一茶は如何なる人ぞ。

一茶は、信州の人なり。寶暦十三年、水内郡柏原驛に生る。父は小林彌五兵衛と呼びて、醸酒を業とせり。一茶通稱彌太郎、俳諧寺と号す。三歳にして母を失ひ、継母の手に育てらる。苛酷の待遇を經て、辛酸を嘗む。性如何に俳諧の道を天に稟けたりけむ、明和五年六歳にして、

我と来て遊べや親のない雀

と吟じたりと一茶自筆の「おらが春」にいへり。六歳の初陣にして此の如し。栴檀の材、何とて深山の朽木と果つべきや。若かりし時は、読み書きの道を中村新甫及堀若翁に授かりしが、天の降せる種は、ここに根ざし深めて、二人が幸にも斯の道の至りも浅からざりしかば、その培へる力も少なからず。やがては天を蓋ふべき枝の茂りも、已に萌せり。壮年の頃江戸に出でて、其日庵素丸の門を叩き、菊明又は竹阿と號せり。されど意合はずして去れり。その時の歌と覚ぼしきは文政十二年門人等の蒐輯せる一茶句集に、

かつしかの栖立退く日さし木のめ吹たるに

古庵にのち住人よ花さかば心さし木の桜とぞしれ

○月が瀬＝奈良県添上郡月瀬村。名張川に沿った梅の名所。

○瀬土＝陶器の産地として知られる愛知県瀬戸市か。

○更科＝更級とも書く。長野県更級郡の地名。姨捨山、田毎の月など名所が多く、また蕎麦の産地としても知られる。

○水内郡柏原驛＝現、長野県上水内郡信濃町柏原。

○小林彌五兵衛＝一茶の父の彌五兵衛は村で中の上のランクの本百姓だったらしい。醸酒を業としたことは記録に見えない。

○栴檀の材＝英雄・俊才など将来大成する人物。

○堀若翁＝俳人。本名、堤孫左衛門徳之。長崎大村の人。

○其日庵素丸＝俳人。本名、溝口十太夫勝昌。江戸本所長崎町の人。

○竹阿＝一茶の師であった江戸の俳人、小林竹阿の名を一茶の別号と誤っている。

とあり。後、隋斎成美、巣兆等を師友とし、大に発明するところあり。遂に四方に飄遊し、文化十一年帰国せり。一茶句集に、

十二月二十四日古郷に入

是がまあ終の栖か雪五尺

とあるは此時の句なるべし。三十余歳、妻を迎へ、四十八歳の時妻を失ひ、其翌年、

小言いふ相手もあらばけふの月

の句あり。後添をめとりたりしも、心ばえよからずして離縁を求む。一茶宥むれど聞かざりしかば、嫁入道具を人に荷はせ、自ら監視して、送り届けたりといへり。孤児あり。愛撫情に堪えず、乳房尋ぬる手を離すは心もとなけれども、男の懐に育つべくもあらねば、若干の金を付けて、里子に遣はしぬ。素より利のため預かりし者にて、冷き乳房に人目を装へるのみなれば、孤児は肥立あしく痩せ衰へて終に死せり。

愛児を失ひて

露の世は露の世ながらさりながら

とは如何に嘆き悲しみたりけむ。

一茶三人の子ありしが、男混蔵、女さと、前後して夭死せり。

さと女三十五日

秋風やむしり残りの赤い花

の句あり、又、

なでしこや地蔵菩薩のあとさきに

の句は「指切るといひし牡丹を手向かな」の句と異調同感、読む者をして暗涙を催さしむ。

○成美＝俳人。夏目八郎右衛門包嘉。江戸浅草蔵前の人。隋斎は別号。

○巣兆＝俳人。藤沢平右衛門英親。武蔵千住の人。

○文化十一年帰国せり＝一茶の帰国は文化九年。

○十二月二十四日古郷に入＝「七番日記」には「十一月」とある。

○妻＝信濃町赤川の常田久衛門の娘、菊。文化十一年四月十一日、二十八歳で一茶に嫁し、三男一女を生んだ。文政六年五月十二日没。享年三十七歳。なお、一茶が結婚したのは五十二歳の時で、「三十余歳、妻を迎へ、四十八歳の時妻を失ひ」とあるは誤り。

○後添＝飯山藩士田中氏の娘の雪を文政七年五月二十二日に娶ったが、八月三日に離縁した。

○露の世は…＝この句、長女さとの悼句。

○三人の子＝この記述は実際と違いがある。一茶は菊との間に長男千太郎、次男石太郎、三男金三郎、長女さとの三男一女を得たが、いずれも夭折した。菊の死後に里子に出されたのは金三郎である。

一女長じて中村某の妾となる。心ざまあしくして、父を省みざりき。文政三年中風症を病み、餘命ありしとて、此よりは蘇生坊といひて、

ことしからまる儲けぞよ娑婆の春

の句ありき。同十年壱月十九日病再発して遂に起たず。柏原驛明専寺裡に葬る。

一茶、性飄逸、畸行多し。白晝と雖も常に灯を點して莨火に供せり。客若し訪うて喫飯時に至れば、與に酒楼に登りて飲食し、其費用を折半して別る。嘗て加州侯出府の途次、使を馳せて旅館に召し給ひしかども、「所用あらば当方へ御座れ」とて応ぜざりき。

何んのその百萬石は笹の露

その時の句作なりけむ。

山住の習ひ、こり採れる柴木を打燻べて据風呂を沸かし、近隣の人々を打招きて浴するが常なれば、一茶も招かれて折々浴を近隣にとれり。或時浴みに招かれて手拭を忘れたれば、あたりにかけありし風呂敷にて汗を拭ひしかば、藍の色に染まりて、宛然青鬼の如き有状して人々を驚かしたることありといふ。

信越の地は雪深かければ、里人深沓とて藁もて編みたるものを穿つ。一茶江戸に出たる時は、深沓の儘にて旅出せり。

時めきし俳人に對面せんとて尋ねたるに留守なりければ、土産にとて持ち参れる、国の名物なる更科の蕎麦粉にてその門口に、

我国は月と佛と

と書きて、餘れる粉を結句の処へ置き、立帰れり。是れ結句は蕎麦ばかりの意にて、更科の蕎麦、姥捨の月、善光寺を詠み込みたるなり。

○一女長じて…＝一茶にそのような娘があったことは記録に見えない。

○ことしから…＝「八番日記」では、下五「娑婆遊び」。

○同十年壱月十九日＝一茶の没したのは、十一月十九日。

○詠み込み＝原文「読み込み」。

著述には「おらが春」と稱する自筆の集あり。江戸に住むこと十餘年、下谷坂本に假りの宿りを定めぬ。

上野の梺に蝸牛のかし家かりて、露の間の夢の結び所とす。きのふあたり、住倦たる人のなせるわざにや、垣の蕣のそれなりに枯れて、その実はほろ〳〵落たり。いく人の泪をかけし果とも思はれて、秋にたち増りて〔哀なり。また間口二尺ばかり〕土をならして菜のやうなるもの蒔置けるが、雪の片隅にはほや〳〵と青みぬ。是必愛度春を迎へて餅いはふべき旦の料ならんか。壁は七福即生の守り張り重ねて盗人の輩を防ぎ、竈は大根注連と云ふもの引はへて回録を逃んとす。荒神松はいまだ野の色ながら、横さまにこけたり。皆たゞ行末いつ迄か住果んあらましぞと見ゆるも、今は雲にや迹をくらましけむ。山にや影をかくしけん。すべていづこかつひの栖ならん。かくいふ我もしばしが程に、又人にかくいはれんことをおもふのみ。

身に添や前の主の寒迄

の句あり。

俳句は一機軸を出して其名大に鳴る。其句振は俗に入りて俗に流れず。儒教の盛なる時に方りて石田梅巌が心学を唱へて通俗を教化せんと力めたるが如く、一茶も又俳諧を以て風教を補けんと期したり。ゆゑに咏物も多くは擬人法を以て同情に熱化す。其中心とする所は同情にして、温き愛に出でざれば、奇警なる諷刺、達悟的なる滑稽、俚諺的なる洒脱にあり。風調の軽妙にして、餘情の縷々として盡きざるは宛も梨を劈くが如く、齒に觸るれば甘漿隨て落つ。されば俳人巨海は句集に題して、翁に古池在て後古池の句なし。一茶に松陰の句ありて後まつかげの句なしといへり。実に此点に於ては一茶の独特にして、

○上野の梺に…＝文化六年十二月執筆の俳文。一茶は上野坂本町に住んだことがある。「梺」は「麓」の俗字。
○かし家＝「一茶俳句集」では「から家」
○哀なり＝「哀なり」以下の〔　〕中の十三字、原稿にない。
○七福即生の守り＝「七福即生、七難即滅」と書かれた護符。
○大根注連＝太いしめなわの俗称。
○回録＝火事のこと。
○荒神松＝台所の守り神の荒神に供えた松。
○寒迄＝原稿は「寒連」。『一茶俳句集』により、「迄」を「連」に誤ったものと見て訂正。
○石田梅巌＝江戸中期の思想家。石門心学の祖。
○甘漿＝甘い汁。

俳諧誰か比肩するものあらん。

彼が畫像自賛に

ひいき目に見てさへ寒き素振かな

これを頼山陽自賛

この膝諸侯に屈せず、聊か故君の徳に答ふ。此眼之を群籍に竭し、先人の囑を虚うせず。此脚母の輿に侍し、二たび芳山を蹐り、五たび大湖に掉し、十たび奠湾を上下すれども、未た嘗て朱頓の門に踵らず。此口残杯冷炙に飽く能はざれども、此手黔藜寒餓を援けんと欲する也。

かに比するに、如此炎々たる紅焔騰りて天を燒かむとする気なしといへども、気宇温藉にして襟を春風に寛うし、豈錦袍の賜を受くべきやの餘情は嫋々として其中に充つるを見る。彼れ又山陽の如く抱負自ら大なるものなしとせざらんや。彼れ胆斗の如く星の光をとりて気芒を吐くと雖も圭角を露はさず、縷々たる萬條陽炎の如く、彼処にあり此処にあり、是を以て靄々たる和気、常に満々たり。天下泰平を唱うて曰く、

松蔭に寝て喰ふ六十余州かな

祥瑞靉々として、枝を鳴らさぬ風颯々たる趣あり。この言放すの豪壮にして餘情の温雅なる、以て見るべし。

一茶は家庭に日常目撃する所のものを捕へて之を描き、温き血潮を點じて靈活せしむ。一茶は実に小児科の医士の如し。只これ術と藥との効をたのまず、温情を以て愛撫し、恐ろしき髯をも小さき手に嬲らせて笑を挑発せり。之を見る者豈喜悦せざらんや。以て親しましめ、以て馴れしむ。

○この膝…＝頼山陽が最晩年の天保二年に池義亮の描いた肖像にみずから賛した文章。
○故君＝山陽がかつて仕えていた安芸藩主浅野侯のこと。
○群籍＝多くの書物。
○先人の囑…亡くなった父親の期待。
○母の輿＝山陽は母親と何度も旅をして、孝養をつくした。
○芳山＝吉野山。
○大湖＝琵琶湖。
○奠湾＝淀川。
○朱頓＝金持ち
○黔藜＝庶民。
○錦袍＝錦織りの立派な着物。
○圭角＝言語や挙動がかどだって、円満でないこと。
○祥瑞＝めでたい前兆。吉兆。
○靉々＝雲の盛んにたなびくさま。
○颯々＝風の心地よく吹くさま。

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは
父母のいつくしみ育つる。
書き賃の蜜柑見い〳〵吉書かな
褒美を眼の前の試筆。
鳴く猫に赤ん目をして手毬かな
猫児をじゃらして手毬つく娘のあどけなさ。
持たすれば雛をなだむる子供かな
ねんねころりとあやかる愛らしさ。
柳からももんぐわあと出る子かな
お化の真似をする悪太郎の動作。
たのもしやてんつるてんの初袷
案外に発育した小供の體格。
人並に晝寝したふりする子かな
もの真似をする態度。是れ「幼女纔六歳、未知巧與拙、向夜在堂前、学人拜新月」の趣を得たるもの。
明月を取ってくれろと泣く子かな
ものをねだる頑是なさ。
かたみ子や母が来るとて手をたたく
死たる人を待ついぢらしさ。
まゝつ子が一つ團扇の修覆かな

○吉書＝書きぞめ。

○持たすれば…＝「文政句帖」には、中七「雛をなめる」。

○ももんぐわあ＝着物をかぶってひじを張り、モモンガのまねをして子供をおどかすたわむれ。ここでは「お化け」と言うのに同じ。

○幼女纔六歳…＝「幼女纔かに六歳、未だ巧と拙とを知らず。向夜堂前にあり、人を学びて新月を拜す。」と読む。

○明月を＝『おらが春』などには、上五、「名月を」。

ま丶子いぢめの慳貪邪険。

餅花の木蔭にてうつあはゝかな

負はれし児のいたいけなる。

山寺や翌剃る兒のいかのぼり

それとも知らず遊ぶいぢらしさ。

いづれか家庭に目撃する所にあらざらん。機微の情致を描き出して歴々觀るが如し。其を以て之を觀るに、一茶は脚本を短形にしたるもの也。愛を以て舞臺となし、情を以て書割となし、聲調を以て科白となし、主格物を捕へて役者となし、其間に躍如たらしむ。故に題咏は悉く背景となりて、餘韵を人の感情に訴ふ。辣腕に非らざれば能はざる也。

涼風の吹く木へ縛るわが子かな

炎天を避ける親の慈悲。

我門を山へ出て見る幟かな

よそめを気遣うて幸先を祈る情。

蚤のあと數へながらに添乳かな

いとしさに敵を恨むも親心。

名月や膳へ這寄る子があらば

これもあれもやらましものをと偲ぶこころ。

下冷の子と寝かはりてねた子かな

感冒さへひかせじといたはる慈悲。

鹿の親笹吹く風にもどりけり

○邪険＝原稿「邪見」。

○餅花＝餅を小さく切り彩色したもの。柳の枝などにつけて正月の神棚に飾る。

○木蔭にてうつ＝『七番日記』、中七「木蔭にてうち」。

○いかのぼり＝たこ（凧）。

○幟＝鯉のぼり。

○偲ぶ＝原稿「忍ぶ」。

○下冷＝からだがしんそこから冷えるように感じること。底冷え。

○下冷の…＝『一茶発句集　続編　下』、下五「添乳かな」。

寝冷させじと心やりする。

親馬が番して飲ます清水かな

児を思ふこころは獣も變らず。

渋いとこ母が喰ひけり山の柿

虫気してもならじと猿さへ子をおもふ。

踏みそめは千代の竹なり雀の子

幸先よしと祝ふは鳥さへも。

慈悲すれば屎をするなり雀の子

たれながしも汚なしとおもはずに食くむ。

竹にいざ梅にいざとや親雀

ここまでござれとよき道へ誘ふ。

雀の子そこのけ〳〵御馬が通る

怪我なさせじとて気を配る。

鶯がぎつとするぞよ咳拂

醒ましてならぬ寝た子の夢。

我宿はなんにもないぞ巣立鳥

押戴てかわらけを持つ。

やれなくなそれほど無事で帰る雁

来た時よりも殖えし手荷物。

行くな雁住めばどつこも秋の暮

○虫気＝小児が回虫や消化不良のため体質が虚弱となる病症。むし。

○屎＝「屎」は「糞」に同じ。「はこ」は糞の古語。

都ぢやとて浮世の外には洩れじ。

鶺鴒きよろ〳〵何ぞ落したか

そゝつかしいのは間違の元。

有情を以て非情に配し、非情を描いて有情を點じ、動作を捕へて精神を描く。体を比興に取り、文を俗語に餝る。円轉滑脱、危くも格を脱せんとして纔に残し、見るものをして手に汗を握らしむ。彼れは実に手取相撲なりき。

虚々実々軽妙を尽して俳壇に縦横す。彼は又画界の一蝶と筆致を同うせりといふべし。一蝶の世態人情を描いて、而も浮世絵の臭味なく、滑稽と諷刺とを加味して、軽快の筆を弄し、其の因する所、福の神の萬歳、地蔵、閻魔の川狩、朝比奈と鬼と首引する、雷の雲乗外して下界に墜ちたる、山伏の煮湯たゝゆる鍋を据ゑて飛雁を祈り落さんと数珠押揉みたる。無を有とすること、一茶の非情を有情に化すると趣を同うせり。

一茶は継母の苛酷に遇ひて成長せり。されば常に慈悲を心に懸けて、人を虐待せまじと誓ひたるものゝ如く、其痕句作の上に躍如たり。何事も自然にうち任せて、自ら覚るに至らざれば強いて爭はずとしたり。所謂身をつねて痛さを知る者に非らされば説かざりしならむ。

男女私にちぎりて、夜ひそかに逃行を教訓して、

人間は露と答へよ合點か

濡れたる今は詮なし、生木を割くの思あらしむるは情に耐えざる所、一茶の人を戒むる、誠に如此し。かくて、一茶は同情の涙にもろく、殊に親の子に對する、この親に對する情に於て、人の憐を知りたるもの、皆自己の境遇より出でたるなるべし。一茶は自己の境遇

○鶺鴒＝水辺に住む小鳥。羽色は黒白・黄色などで、長い尾を上下に振る習性がある。

○有情＝木や石などの非情のものに対して人や一切の動物をいう。

○比興＝おかしく興あること。

○手取相撲＝技が多彩で巧みな相撲。

○一蝶＝英一蝶。江戸中期の画家。人物・花鳥にすぐれ、軽妙洒脱な画風を創始した。

○朝比奈＝狂言の一。閻魔が朝比奈良秀を地獄へ落とそうとするが、逆に引き回され、遂にその供をして極楽へ案内する。

より人の上を察するに敏なるものにて、思やりの深きこと人に優れたり。ゆゑにその句作の多くは餘情を以て讀者をして聯想を起こさしむ。

根岸にて

山吹をさし出しさうな垣根かな

太田道灌を聯想せしめ、

名月や先はあなたも御安全

「趙氏連城璧　由来天下傳　送君還旧府　明月滿前川」といふ詩を聯想せしめ、

榾の火にうしろむけけり最明寺

常世の清貧を追懐せしめて謡曲「鉢の木」に思ひ及ぼさしむ。一茶は栄辱を以て心を驚かさず、稜骨節を屈せず、襟度瀟洒として、温なる情内に満つるものなり。

下谷一番の皃して更衣

痩せ蛙負けるな一茶こゝにあり

鳴き出して五分でも引かぬ蛙かな

の如き、又は、

悠然として山を見る蛙かな

罷り出たるはこの藪の蟾にて候

の如き、長虹を吐いて而も電撃の気を存せざるは、一茶其人を想見するに足る。

一茶は実に奇骨稜々として、権門に媚びず、加州侯の招きにさへ応ぜざりと云へども、彼れは同情の念深くして、事の仁慈に出づるものは涙を拂うて從はんとせり。

上總国百首の郷は、東南に山連なり、西北にうみ開けて、防人の備へに究竟の地な

○山吹をさし出しさうな＝太田道灌が狩で雨に逢った際、蓑を貸すよう頼んだところ、少女が山吹を差し出して蓑のないことを言外に示したと伝えられる故事を踏まえる。

○太田道灌＝室町中期の武将。築城・兵馬の法に長じ、江戸城を築いた。

○趙氏連城璧…＝唐の詩人、楊炯の詩「夜趙縦を送る」。『唐詩選』に収める。原稿は結句の「明月」を「名月」と誤っている。

○「鉢の木」＝謡曲の一。最明寺時頼が諸国行脚の帰途、上野国佐野で雪道に悩んだ時、佐野源左衛門常世が愛蔵の梅・松・桜の鉢の木を焚いてもてなす。

○蟾＝ひきがえる。

○上總国百首の郷は…＝『我春集』に収められた文化八年作の俳文。上総行脚中の見聞に基づくものらしい。

りとて此度陣屋いとなむ縄張といふこと有り。其畠の瘤のやうにさし出て、妨なる小家あり。主と見えて翌をもしらぬ老婆ひとり、麻をうみて居たりけるを、奉行人深く憐みて、「汝子ありや」といへば、老婆いふ、「をのこひとりもちたりけるが、いつ〳〵のとし、古郷をよそにふり捨て、今は江戸の本所とやらんに、人の髪ゆふわざをなすよし、風のたよりに聞侍る」とばかり、泪はら〳〵こたふ。「さあらば其男呼返すべし。よろしき替地に、かひ〴〵しき家をあたへん。しかのみならず、其男には永く髪結司のゆるし文とらせて、汝には生涯二人ぶちといふを申下して、身をやすくすぐさせん。あさ糸の細き稼ひをやめて、遅々たる春の日には、ちりかふ花に無常を観じ、凄々たる秋の夜には、傾く月に西方をねがひ、明暮心任せに芹の種を蒔なばなんぼうたのしからん。汝の此家、このかまへのさわりになるこそ天より汝に幸ひ下し玉ふなれ。とくとく爰をしりぞき、あしこにうつれよ」といふに、老婆むく〳〵とはらだたしきそぶりして、灯心つかねたらんやうなる首打ふり〳〵いふやう、「よくもあざむき玉ふものかな。是はわらはが先祖よりいく世ともなく住ふるして、大事の〳〵栖なれば、たとへ黄金星にとどく程たまはるとも、我目には一椀の麦飯にしかずとこそ思ひ候へ。たゞ〳〵此はにふの小屋こそさうなき寶なれ、よしや命断るとも外へは行かじ」と、手すり足すり貝を作りて、なかぬばかりに申せば、奉行人の慈悲も、今は施すべきよすがなく、「老婆のちにな悔いそ」とふたたび縄ばりして、つひに其家をよきて地どりなりぬ。あはれ、月日の照らすかぎり、露霜のおつる所に生とし活けるもの、たれが国命そむき奉らん。しぶときをこの者にぞありける。

月さへもそしられ玉ふ夕涼み

○百首の里＝千葉県富津市竹岡。文化八年（一八〇六）、江戸幕府は浦賀水道防備のために竹岡に砲台を築き、陣屋を置いた。

○麻をうみて＝「績む」は繊維を寄り合わせて糸にすること。

○本所＝東京都墨田区内の地区の名。もと東京市三十五区の一。

○髪結司のゆるし文＝「ゆるし文」とは髪結職の鑑札許可証のことで、髪結職宗家の北小路家が出した。

○芹＝「菩提」の略字。菩提は煩悩を絶って悟りを得ること。極楽に往生すること

○はにふの小屋＝埴生の小屋。「埴」は泥の意。土間にむしろを敷いただけの粗末な小屋。

○貝を作りて＝口を貝の形にする意。口をへの字に曲げて泣き顔になること。

○をこ＝おろか、馬鹿。

○月さへも＝「月」は奉行人を譬えて言う。

是れ奉行の處置、仁慈に出でたるものにて、一點の非難するところなきに、かたくなる老婆は命に従はざりしを、一茶は難じたるなり。然れども序の如くなれば、老婆のいふところも敢て一理なきに非らず。黄金星にとどく程たまはるとも、我目には一椀の麦飯に如かずとし、栄辱のために心を動かさざる所、健気に似たり。されど国命に背きてまでも、餘命幾何もなき老婆が灯心の如き首うち振れるは、理非を解せぬ頑冥諭し難し。一茶彼れを稱して此を貶したるは、自己の仁慈心に深く感じて老婆の頑冥を憐み、仁慈も頑冥なるものに遇ては、施すに途なきを嘆じたるもの也。ゆゑに一茶の人世観は同仁主義にて、その仁に洩るゝものは度し難とし、貧富貴賤は是れ天命なりと覚悟せり。

侍に蠅を追はせる御馬かな

かくして彼は、能其分に安じたり。

涼風も隣の竹のあまり哉

無限欲有限命

此風に不足いふなり夏座敷

此心　恭敬　粛々として、粒々皆辛苦。

もたいなや晝寝して聞く田植唄

溢れて、

神国は天から藥降りにけり

愛国の情となり、再び発揮して、

我国は草もさくらを咲きにけり

大和魂を発露し、宣長の山桜の咏、象山の桜賦を読む心地す。一茶は実に仁慈を以て万物

○同仁主義＝親疎の別なく、ひろく平等に愛しようとする考え方。

○辛苦＝原稿は「心苦」。

○宣長＝本居宣長。江戸中期の国学者。『古事記伝』『源氏物語玉の小櫛』など多数の著書がある。

を熱化せんとせり。

蠅一つうてば南無阿弥陀佛かな

やれうつな蠅が手を摺る足を摺る

椽の蠅手を摺るところうたれけり

やよ虱這へ〳〵春の行く方へ

彼岸とて袖に這はする虱かな

閨の蚊のぶんと計りに燒かれけり

一つ蚊のだまつてしくり〳〵かな

それそこが蟻の地獄ぞ這ふ毛虫

とぶな蚤それそれそこが隅田川

虱をひねりつぶさんことのいたはしく、また門に捨て断食さすも見るに忍ばざる折から、御仏の鬼の母にあてがひ玉ふものを、ふと思ひ出して、

我味の柘榴へ這す虱かな

嗚呼、一茶をして慈悲といふことを終始心に忘れざらしむるまでに至らしめたるものは不慈悲の継母なりしならむ。彼れ六歳にして、

我と来て遊べや親のない雀

と咏じたる同情の念は、その終生まで離れざりしなり。子を持てる人、心して本傳を讀み給へね。

明治丙午蝋月四日夜起稿　毎夜執筆十一日夜脱稿

○山桜の咏＝宣長が自身の画像に自賛した「敷島の大和心を人問はば朝日ににほふ山桜花」の歌をさす。「咏」は「詠」に同じ。

○象山＝佐久間象山。幕末の勤皇家。蘭学・砲術に通じ、海防の要を主張した。

○桜賦＝万延元年に書いた、桜をほめた漢文。「賦」は多く対句を用い、句末に韻をふむ美文。

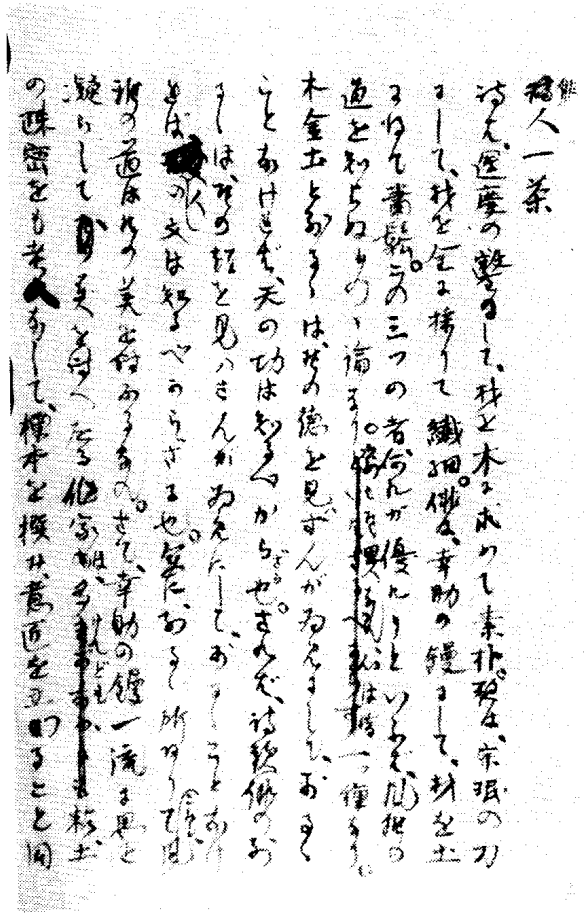
○明治丙午＝明治三十九（一九〇六）年。丙午は明治三十九年のえと（干支）。

○蝋月＝十二月の別名。極月。

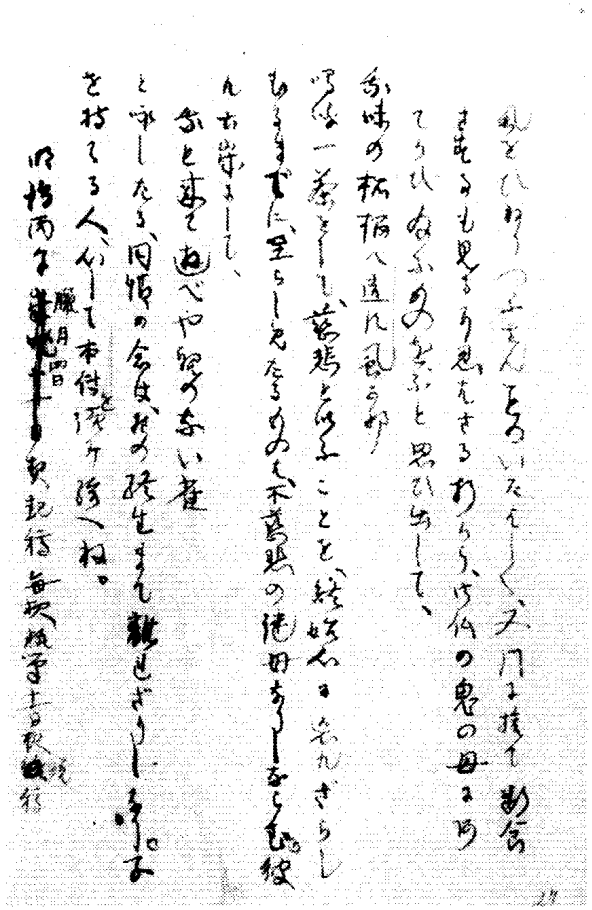
表の戸も明いて居り　庭には一面に粃が手さふをあるに、留守居の人も居ないかと見まはば、やがてうら若い一人の娘子が、白き腕をあらはに鬱金の襷を背に振りかけながら土間の出口へ現はれた、麻の衣に青袴つけた極めて質素なつくり、掻き垂髪を項のほどりに束ねて、裾短かに素足を踏む、帯と襷にいさゝかな飾りを見るはかりだ、手古奈には飾りもつくりもいらぬらしい、美しい目美しい口美しい鼻いふも愚か語りだ、胸からも頸からも光かさすのである、春花の笑み咲くとか紅玉の丹つらふ色とか、そんな形容詞も手古奈に對しては役に立たない、粃の始末と留守居をかねて、今日は手古奈が獨家に殘つたのであらう、日の傾くまゝに今たり立つて、粃の屑片つけに取掃るところらしい。

此夏の末の頃から何の用とも判らなく、三日とあけずに真間のあたり駒を乘り廻はして、雨風の日にさへ姿を見する郎子があつた、殊に榛の木の門口や南天垣の外には蹄の跡の消える間もないといふ位であつた、果ては里の

「真間の手古奈」の原稿の一枚目



「俳人一茶」の原稿１枚目の表



「俳人一茶」の原稿13枚目の裏（末尾）

文字の横の1/3は資料1ページの3行目から切り抜いた、との意です。

雨

真間の手古奈

雨かんむりの書き方

自然に左下へ短くはねている

一般的な長さである

雨冠になると二画目は短くなる

四つの点は左右とも二つを一つに省略している

俳人一茶

縦画のように引き、とめて左上へはね上げている

非常に長い

雨冠と雨の書き方が同じになる辮のある書き方である

四つの点右の二つは一つの点になっていない

月

真間の手古奈

二本の横画は短く、離して素朴な線で書いている。

二本目の横画は全て縦画の内側に収まっている。

縦画はそのまま止めるか、穏やかに短く左へ抜いている。

俳人一茶

二本の横画は全て続けている。線は強く勢いがある。

二本目の横画は全て縦画の右へかなり長く出ている。

縦画はそのまま止めずに勢いよく左上へはねあげて次の横画に続けている。

見

真間の手古奈

曲り、はね、の書き方

曲りの縦画と横画の区別がはっきりせず、短い一本の曲線のように書いている。

はねの方向は右上がほとんどである。

＊曲り、はねの書き方の特徴は「児」「脱」「悦」「池」「化」「乳」等にも同様に見られる。

風構えの、そり（点線の部分）が短い。はねは小さく穏やかに書いている

俳人一茶

曲りは縦画をしっかり書いてから横画に入っている。線は長く引いている。

はねの方向は定まらず、右上、真上、左上と、様々である。

はねが異常に長く勢いがあり、辮のある書き方である。

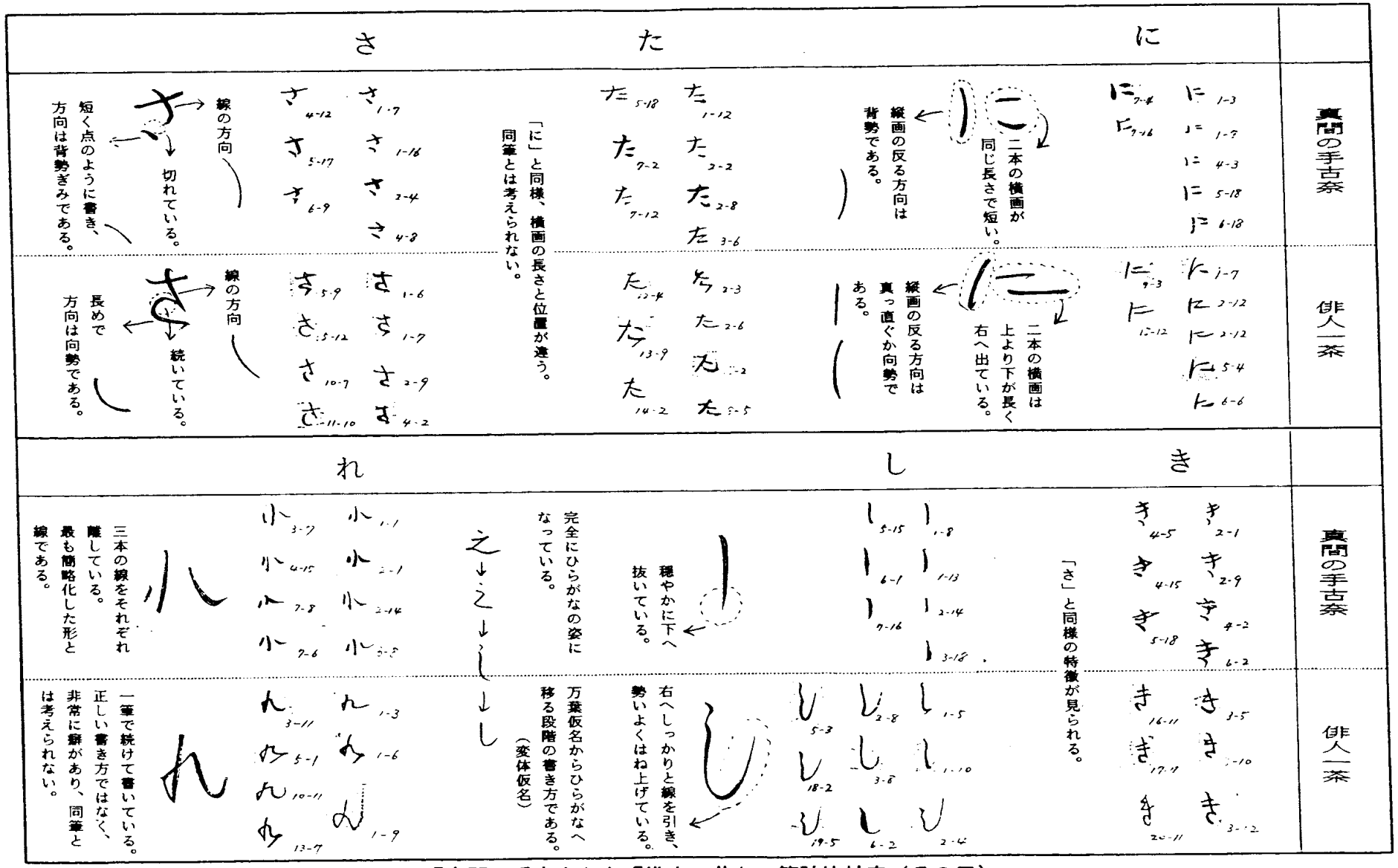
風構えの、そりが長い。はねは大きく勢いよく書いている

「真間の手古奈」と「俳人一茶」の筆跡比較表（その一）

	頁	門
真間の手古奈	項 1-5　頷 1-9　頃 2-13　顔 2-18　顔 3-1　頃 5-10　顔 5-14　顔 7-4　傾 1-13 おおがいの書き方 頁 草書の書き方で、「目」の中の二本の横画は全て省略している。	間 1-4　門 1-17　間 4-11　閉 5-5　問 6-17　問 7-4　閉 7-4　閉 8-14 門構えの書き方 すべて行書である。 門 長い　門 短い 二本の縦画の長短も辭のある書き方で、同筆とは考えられない。
俳人一茶	瀬 2-2　頼 2-3　頃 10-12　頼 13-8　頃 24-8　頃 24;10　頃 24;10　頃 5-3　頼 10-8 行書の書き方で中の二本の横画を淡々と書いている。 頁	間 2-3　門 3-10　間 4-11　間 8-3　門 10-12　間 15-1　閉 27-1　閉 31-8 すべて草書である。 門 短い　門 長い

	艹	心
真間の手古奈	若 1-3　茶 2-11　葉 3-10　若 3-13　茅 3-17　葦 4-3　藻 6-10　花 8-2　芝 9-7 草冠の書き方 行書の書き方で、縦画は二本とも横画を貫いている。 艹	悪 2-1　思 2-4　怒 2-6　念 7-8　思 2-16　忘 3-5　心 4-9　戀 5-5　悪 6-1 心、下心の書き方 二つの点を離しているのと二つの点は全て続けている。 続けているのがある。 どちらの収筆も短く、 必ず点線より上で終わってている。 心 心
俳人一茶	花 2-2　菊 2-5　菜 2-9　茶 3-4　芯 4-2　荷 4-11　瓦 5-9　菊 7-7　葉 8-5 草書の書き方で、縦画は二本とも横画の上に収まっている。 艹	心 1-4　思 1-9　恵 1-11　恋 4-2　思 9-10　徳 10-9　恋 14-12　恋 14-12　悲 15-8 下心の収筆はすべて長く、 点線より下に勢いよく伸び ている。 心

「真間の手古奈」と「俳人一茶」の筆跡比較表（その二）



「真間の手古奈」と「俳人一茶」の筆跡比較表（その三）

	む	ひ
真間の手古奈	線を切って、広くあいている。 丸を書かず、線を切っている。 続いている場合も筆を押し上げるだけで、丸を書いていない。 短く、Vの形 線の方向	線の方向 止めるか下へ抜いている。
俳人一茶	角張った書き方で続けている。 丸を書いている。 丸がつぶれていても、筆は回している場合が多い。 横に長く引き、」の形 線の方向	線の方向 上へはねあげる筆づかいである。

	て	つ
真間の手古奈	収筆の線の方向は横または右下である。 静かに止めている。 素直に左横から筆を入れている。 字形は横長である。	素直な丸みのある曲線である。 素直に筆を下ろし、そのまま右へ引いている。
俳人一茶	収筆はすべて勢いよく上へはね上げている。 逆筆で、右から左へ筆を突っ込んでから右へ引いている。 字形は縦長である。	角張った抑揚のある曲線である。 筆を立てて、トンと押さえてから右へ引いている。

「真間の手古奈」と「俳人一茶」の筆跡比較表（その四）